論 文 要 旨

論文題目 The Mother of All Innocence: Family, Letters, and Violence in the Works of Thomas Pynchon （無垢の根源―トマス・ピンチョン作品における家族、文字、暴力）

申 請 者 玉井潤野

論文要旨

トマス・ピンチョンは 1963 年に *V.*（『V.』）でデビューした、現代アメリカ文学を代表する作家である。本論考では彼の第 3 作 *Gravity's Rainbow*（『重力の虹』）から最新作 *Bleeding Edge*（『ブリーディング・エッジ』）までを発表順にとりあげ、彼の作品を特に暴力、文字、そして家族に注目して解釈した。

東西冷戦の緊張感が高まった時期に出発したピンチョンは、核戦争という圧倒的暴力への問題意識を有していた。第 1 章では、『重力の虹』の架空のロケット兵器が解釈行為と言語を不可能にすることを明らかにする。第 2 章で分析する *Vineland*（『ヴァインランド』）はすでに冷戦体制が崩壊寸前であった時期に発表され、ピンチョンが改めて比喩的言語を駆使して作品世界を構築するにいたったことを論証する。文学作品の内部において個々の比喩表現の間に見出されるネットワークを活かしつつ、ピンチョンが *Mason & Dixon*（『メイスン＆ディクスン』）において、アメリカを支える理念であるところの自由と平等の問題に取り組んでいることを、第 3 章において示す。

21 世紀のピンチョン文学にとって、2001 年の米国同時多発テロが大きな転機になったと考えられる。*Against the Day*（『逆光』）は、表面上は資本家と無政府主義者の対立を描いているが、両者がいずれも怒りに基づいて政治的暴力に訴え自滅する性質を持つことを第 4 章で明らかにする。ピンチョンは、全体主義国家を描いたジョージ・オーウェル『1984 年』に序文を寄せており、資本主義と国家権力に関する政治的問題意識をオーウェルから受け継いだピンチョンは、第 5 章でとりあげる *Inherent Vice*（『LA ヴァイス』）において、家族の比喩こそが暴君の政治的力を隠蔽する危険性を描いている。第 6 章では、ピンチョンにとって根本的な問題である暴力に関して、男性および女性を描く比喩の特徴が作品を経て変化していること、そして暴力抑制の鍵として女性を描く彼の近年の傾向がもっとも顕著に現れた作品として、『ブリーディング・エッジ』を読み解く。

導入：How to Cut our Teeth on Pynchon（如何にしてピンチョンで牙を研ぐか）

しばしば超自然的な要素を数多く含むピンチョン作品を解読するにあたり、いわゆる現実世界を性急に参照するべきではなく、彼の作品世界を構築する文学的言語の特性がまず明らかにされねばならない。自我の核、あるいは他者や周辺世界の抵抗を押し切って自らを顕然させる権力・暴力の特権的な形象である「歯（ないし牙）」の細部に注目することであきらかになるように、本稿のアプローチはピンチョン作品の政治的側面を捨象するものではなく、むしろそれを補完するものである。

第 1 章：The Voice of the Void in *Gravity's Rainbow*.（『重力の虹』における虚空の声）

『重力の虹』は、核戦争という表象不可能な暴力を背景にする。幾多の細部から、摂食行為と殺害のそれとのつながりが浮かび上がり、登場人物たちは自我の独立性を疑わないために敗北することが示唆されている。『重力の虹』の解釈自体も、作者の意図を前提としない段階にまで達し、作品の中心であるロケット ooooo 号もまた、ゼロの羅列と同時に、母音 O による絶叫と捉えられる。しかしこの認識は作品理解の可能性を致命的に損ない、『重力の虹』はその読解不可能性を暗示し続ける。

第 2 章：Vitalization of Language in *Vineland*.（『ヴァインランド』における言語の再賦活）

『重力の虹』において、その物質的基盤にまで分解されることでピンチョンの言語は崩壊した。『ヴァインランド』は、語の意味を損なうというより二重化する比喩を駆使することで、ピンチョン文学の再出発を記した。とりわけ、自動車および樹木の擬人化は、それらに最も敏感に反応する登場人物たちを通じて物語の流れを最終的に方向付ける要因であり、人類の滅亡が間近に思われた冷戦期を脱し、ピンチョンは死と破壊に抗する生命の力を描き始めた。

第 3 章：Memory and Drudgery in *Mason & Dixon*.（『メイスン&ディクスン』における記憶と雑務）

『メイスン&ディクスン』はピンチョンの本格的な復帰を証し立てるとともに、彼が明確にアメリカの政治的理想や歴史的負債を引きうけ始めた作品でもある。対照的な二人の主人公はそれぞれ自由と平等の理想を体現する。外的影響にまるで左右されないことを意味する完全な自由は不可能だが、メイスンはその理念を目指し試行錯誤をやめない。極端に平等を追求するディクスンは奴隷商人から奴隷を解放するばかりか、人間ならざる機械や動物と交感し自らをそれらの他者に近づけていく。

第 4 章：The Fathers on Fire of Fury in *Against the Day*（『逆光』における憤怒の炎に包まれる父親たち）

第一次世界大戦や労働運動の盛り上がりを背景とした『逆光』におけるピンチョンは、国家権力と資本主義との結びつきに注目し、両者を媒介する男性中心主義、とくに父親の権力の批判を試みた。いずれも強大な力を有し互いに対立し作中で死亡することになる二人の父親の登場人物は、これらの暴君に似た父がやがては自らの攻撃性によって自滅することを示している。ピンチョンが最終的に、健全な政治的怒りの担い手として暗示するのは、女性ないし子供である。

第 5 章：Self-Destruction of Community in *Inherent Vice*（『LA ヴァイス』における共同体の自己破壊）

アメリカ現代史の転換点となった 60 年代末から 70 年代にかけての時代を三度取り上げた『LA ヴァイス』は、理想的な共同体のモデルである家族の内部崩壊を描く。国外的にはヴェトナム戦争、国内的にはマンソン事件等により共同体の成員が互いへの疑心暗鬼に陥り、家庭は警察権力により侵食される。警察的に振舞わざるを得ない探偵の主人公を通じ、ピンチョンはやはり暴君と化した父親（および病める母親）のために自滅に向かう家族として、ウォーターゲート事件を数年後に控えたアメリカを描いている。

第 6 章：Reconciliatory Maternity in *Bleeding Edge*.（『ブリーディング・エッジ』における調和的母性）

核戦争の恐怖を背景にしたピンチョン文学は、噴出する暴力を一貫して男性的なものとして描いているが、女性および母親の役割は大きく変化した。暴力的な衝突にいたる男性的な破壊と死の力に対する防波堤として女性を描くピンチョンの試みは、『ブリーディング・エッジ』の主人公をもってこれまでで最高の完成度を示しており、作中の二人の悪役と彼女の関係からは、戦争やテロ、そしてあわや核戦争を引き起こしかけたケネディ大統領への批判的まなざしが読み取れる。

結論：Letter Bomb and Love Letter（郵便爆弾から恋文へ）

ピンチョン文学は当初、想像不可能な暴力の噴出を想像させるという矛盾した課題を反映し、最終的な読解の不可能性にいたった。人類の未来に対するピンチョンの危機感は冷戦終結後も変わらないが、特に『ヴァインランド』以降は、運命論的に破局を受け入れるのではなくそれに抗する試みが続いている。ピンチョンが必ずしも明確に描くわけではないその希望を読み取るためには、『ブリーディング・エッジ』の子供のように言語の字義的・比喩的な区分を乗り越える無垢が必要とされる。